㊅ サクランボ大好き

「大好きな果物は何ですか」
と尋ねると，どんな答えが返ってくるのでしょう。私だったら，サクランボ，マスカット，リンゴなどを挙げるでしょう。生駒台小学校で発行した学校だより「でんしょばと」の入っているフロッピーから「サクランボ」をキーワードにして検索すると，2 つの文章が出てきます。

1 つは，昭和 63 年 7 月 16 日付けの「でんしょばと」第 12 号で，次のように書いています。

……

生駒台小学校に来てうれしかったことは，子どもたちの声が聞こえることです。そして，子どもたちがいろいろと語りかけてくれることです。

「校長先生，わたしのお弁当，きょうのデザートはサクランボやねん。学童（学童保育所のこと）へ行って食べるねん」
これは，ある土曜日のことでした。下校の用意をして，校長室の前の廊下を通りかかった子どもの声です。いかにもうれしそうでした。
「いくつ入っているのかな。１つ欲しいなあ」と言うと，ランドセルを下ろし始めました。あわてて「いいよ。いいよ」とさえぎりましたが，ほんとうに出してくれそうでした。

子どもたちにとって，お弁当は大きな楽しみです。まして，大好きなものが入っているとなれば，このお弁当を食べる時間は待ち遠しいものであろうと思いますし，食べる時間はお弁当を作ってくださった方との心の触れ合いの時間となるのに違いありません。すべてが既製品になりがちな現在の世の中ですが，心くばり気くばりの１品を添えてみることは，お弁当だけでなく，子どもたちとの会話にもいえるこ

とではないでしょうか。

あるお母さんは，自分の留守中に帰宅してくるだろう子どもに

「お帰りなさい。しっかりがんばれたかな。おやつはイチゴ。冷蔵庫の中よ」

「お願い。買い物に行っといて。欲しいものは○○と□□。今日はとっても忙しくて，帰ってくるのは夕ごはんぎりぎりになると思うの」

などといった手紙を書いておかれるのだそうです。

これも親と子の心と心をつなぐ 1 つの方法でしょう。そして，お手伝いを頼んだことは，子どもに家庭の一員としての，しっかりした存在感を与えるに違いありません。お互いに忙しい上に，会話や休息の時間までテレビに取られてしまったりするこのごろですが，たった 1 枚の紙きれであっても，親と子をつないでくれることは確かです。

間もなく子どもたちの生活の場すべてが，それぞれのご家庭になる夏休みです。今年の夏，子どもとどうかかわっていくかを考えていただきたいと思います。

……

もう 1 つは，「ヴォワール会の展覧会」と題するもので，平成 3 年 11 月 27 日付けの「でんしょばと」第 173 号です。

……

11 月 24 日，京都市で開かれた聴覚に障害のある人たちの美術サークル「ヴォワール」展に行ってきました。

絵は好きです。しかし，習ったことのない私ですから，難しいことは分かりません。けれども，どの作品も，とても美しく心を打たれるものでした。そして，このサークルの皆さんが，生き生きと創作にあたっておられる意気込みを感じさせられました。F さんの作品は，美しい緑色が印象的な「北欧の女」と「静物」でした。

私がヴォワール会のことを知ったのは，先月末の個別懇談のあと，Ｆさんが校長室に来られたときのことでした。そして，こんなメモを頂きました。一言一言はっきりと話されるＦさんの話はよく分かるのですが，メモにして来られたのは，「もし聞き取れないところがあれば…」という彼女の気遣いからのようでした。このメモには，

「11 月 3 日（日曜日・文化の日）午後 7 時 40 分〜7 時 55 分，ＮＨＫ教育テレビの番組『聴覚障害者の時間』に，私たちの美術サークル『ヴォワール会』が紹介され，私の絵も 1〜2 枚映ります。お時間がありましたら，どうぞご覧ください」

と書かれていました。

この番組の中で，Ｆさんは司会者の問いに，「昭和 56 年の国際障害者年をきっかけに，聴覚に障害のある者が集まってこの会を作りました。視覚文化を通した社会参加で聴覚障害への理解を深めてもらおうとしています」などとお話しされていました。紹介された作品の 1 つである「青い皿とサクランボ」は，ほんとうに美しい作品です。サクランボがみずみずしく光っていました。

私は，学校に設置されたばかりのファックスで感想をお送りしました。それは，ファックス送信の第１号でした。この新しい機械は，より豊かな交流を可能にしてくれたのです。「共に生き，共に育つ」世の中です。こんな交流を，もっと広げていきたいと思います。「青い皿とサクランボ」は 29 日から体育館２階で開催される育友会美術クラブ展に出品されます。ぜひお出かけください。

……

生駒台小学校での 4 年間の勤務を終え，生駒小学校に転勤してからのある夜，彼女から電話がかかってきました。

「もしもし，校長先生。今度，先生がほめてくださった『青い皿とサ

クランボ』をチャリティバザーに出します。先生にも協力していただければと思って電話しました。私はお返事が聞けませんから，主人に代わります」

あの青色を目に浮かべながらチャリティに協力させていただくことをお伝えしました。生駒市内の画廊で展示されていたこの作品は，今，私の手元にあります。

私とＦさんとの出会いは，長女Ｓちゃんの入学説明会でした。事前にＨ先生から，「今度，１年生に入学するＳちゃんのお母さんは耳が不自由なので，ずいぶん心配されています。そこで，校長先生にお願いがあります。Ｆさんの方を向いてお口が見えるようにお話をしてあげて欲しいのです」と言われていた私は，そんなことに気をつけて話しました。彼女は，私の口許をじっと見つめ，一言も聞き漏らさない（見落とさない）ようにされていました。あの目の輝きが青い皿とサクランボの輝きと重なってくるのです。

こんなことがあって，一層サクランボが好きになったのかもしれません。ぜひ一度，たわわに実るサクランボを見てみたい，初夏の山形への旅，それは私の夢なのです。